

アイドルとフェミニズム

—日本の女性アイドルから考える「私らしさ」—

「恋愛禁止」「卒業」など日本の女性アイドル独特のルールや暗黙の了解、「水着グラビア」、握手会・2ショット会などいわゆる「接触イベント」などのお仕事の幅に違和感を抱いていた。これらを解決するために、今回の研究目的として、①女性アイドルを守り、文化として発展させるためには？②「女性」アイドルではなく「アイドル」として活動することは難しいのか？③女性アイドルの多様化を実現させる方法はあるのか？の3点を挙げた。研究方法としては、フェミニズムやアイドルに関する本、インターネット上の記事、ウェブサイト、動画をもとに行った。

先行研究では、年上メンバーへの「ババア」いじりや、卒業制度など、若さで価値付けられるような社会的抑圧による「エイジズム」と、制度そのものが人権侵害にあたるのではないかと、さらに「異性愛主義」的な面が見受けられる「恋愛禁止ルール」について明らかになっており、家父長制的愛規範の影響を強く受けているのではないかと考えられる。しかしまだ先行研究にないものでは、濃いメイクや派手な髪色は批判を受けることが多い等の処女性が求められること、水着グラビアをやらないことへの批判などの問題もある。

以上の問題から、様々な問題の根底には家父長制が絡んでくるのではないかとという仮説を立て、主に「ファンからの立場・目線」での家父長制意識が強いのではないかと、そして女性（同性）ファンの介入が解決の糸口になるのではないかとという問いを挙げた。

本論では、日本の女性アイドル界で実際にあった事例を3点ピックアップし研究を進めた。1つ目は、「好きな色のリップを塗りなさい」女性アイドルに求められる「処女性」—アンジュルム和田彩花・笠原桃奈より、2つ目は、女性アイドルに向けられる視線—AKB48 柏木由紀のYouTubeより、3つ目は、「アイドルだって living」多様化が進む世の中で目指す女性アイドル界の姿は？—LOVE Be selfish より とし、女性アイドルを取り巻く問題を様々な視点から捉え、第3波フェミニズムに則って解決の手立てを探った。

その結果、日本の女性アイドルは非常に処女性を求められていること、そしてそれらはホモソーシャルに起因していることが明らかになった。ホモソーシャルは家父長制がもたらしたものであると考えられるため、主に「ファンからの立場・目線」での家父長制意識が強いことと、それらを解決するためには女性（同性）ファンや運営の介入が解決の糸口になるのではないかとということが考えられた。現在様々なアイドルがフェミニズムへの関心を示している他、同じアイドルファンでもかなり行動に差が出ていることから、ジェンダーに限らず、メンバーのフェミニズムへの関心やグループのコンセプトによって、ファン行動に違いが出るのではないかとということが明らかになったため、これらを今後の課題とする。